

御許山に錦旗が立った

小浦村庄屋「雑話録」より

入江秀利

大政奉還ですべてが終わったのではなかった。

幕藩体制に行き詰まっていた將軍慶喜は、自分を盟主として公卿や藩主で議會を興す、公議政体を主張する山内容堂や松平春嶽の主張に期待していたのである。徳川家の命運をかけた論争に明け暮れる京都では、いきりたた会津・桑名の藩兵と薩摩・長州の藩兵が一触即発の状態であった。慶応四年（明治元年）正月二日、論議が朝廷側の不利に傾くと、薩摩・長州を中心とする官軍が鳥羽と伏見で旧幕軍への攻撃を開始した。戊辰戦争の勃発である。諸国の藩主は朝廷・旧幕どちらにつくべきか態度を決めかねて右往左往していた。

御許山騒動はこのような時に起こった。

その二年前、慶応二年（一八六六）、小倉戦争で小倉藩は長州藩の猛攻に敗れて撤退した。この混乱に乗じて

豊前豊後の尊皇派は行動を起し、馬城峰（御許山）に本陣を据え、幕府勢力の拠点日田を占拠して討幕の狼煙をあげようと密かに計画していた。

当時、日田は戦火を逃た小倉藩民や敗走する藩兵でごったがえした。熊本・久留米藩兵が日田の守衛についていたが、西国郡代窪田治部右衛門は農兵を募って「制勝組」を組織して、日田の防衛力を高めようとしていた。

慶応二年十二月、長三州一派が木の子岳で決起しようとしたが発覚して追われた。別府に潜伏していた長三州を、亀川村庄屋高橋廣太郎（敬一）が、山口に逃がした疑いで捕らえられ、日田永山役所の牢舎につながれた。

別府も維新の波をかぶっていた。

慶応三年、別府地方を含む豊後・直入の幕府領は警護を固めるために、島原藩預けから九州の雄藩肥後藩に預

け替えになり、肥後藩の鉄砲隊が別府村の海門寺に進駐して、浜脇村の崇福寺に豊後幕領に対する警衛の本陣が置かれた。

郡代の弾圧が強化されると、幕吏に追われる豊前豊後の尊皇派の志士は、長州藩の報国隊に逃げ込んでその庇護を受けて、連帯して行動するようになっていった。

戊辰戦争で中央の政局が混乱した慶応四年の正月、

『正月十四日夜四ツ頃、四日市御陣屋、東御坊庄屋もとへ放火いたし、御陣屋の大砲を奪い取り、それより宇佐を通り御許山へ引き籠もり候段、十五日ひる頃風聞くわしく相分かり申さず事。

十五日、立石より日出表へ早打ちに付き注進、同所(日出藩)より騎馬早打を以てお聞かせ御出しのよし。

給人各 宇都宮隆吉

中小姓 若林忠兵衛』

ついに、四日市で件の計画が断行された。

小浦村(現豊岡)庄屋脇谷時三郎は、日出藩に到着し

た立石藩の早打の報せを聞いて「雑話録」に記録した。また、日出藩では詳しい情報を得るために、折り返し家臣二人を早打ちで四日市に送り出した。

次の記事は、島原藩領高田詰めの矢嶋銀右衛門が、肥後藩領鶴崎へ急使として小浦村を走り抜けたときの聞き書である。

『十六日、鶴崎早追として御通行

嶋原家中高田詰 矢嶋銀右衛門

矢嶋殿へ承り候ところ、四日市御庄屋、東御坊など人家六十軒焼失、大砲・武器・金二千両奪い取られ、嶋原領その人夫え申し付け御許山へ運送いたさせる。

長州勢の由、六七十人その山へそのまま相籠もる。もつとも、宇佐宮へ拝礼いたし候の由の事(に)候。

別府御警衛所より兩人聞き合いに来る。』

御許山騒動は、十四日の夜更けに、六十人ほどの一隊が、幕領久留米藩預かりの四日市陣屋陣屋を襲った事件である。世間では「四日市大変」と呼んでいる。

突然銃撃を受けた陣屋警備の農兵や役人が驚いて退散すると、襲撃者たちは陣屋の大砲二門と弾薬を奪い、役人たちが逃げ込んだ東本願寺別院に火をかけた。

翌十五日の弘暎、大砲を引いた一隊は宇佐神宮に参拝して、御許山に登り山上の僧坊に錦旗を立てて立て籠もったのである。この襲撃者の一団は、長州藩報国隊へ身を寄せていた佐田秀（安心院）を中心とする草莽の志士と、同調する報国隊の脱隊者、総勢六十余人であった。彼らは、勤王派の公卿、花山院家理（いえざと）を盟主にすえ三条美美から錦旗を戴いて、大義名分のもとに挙兵する計画であった。しかし、長州藩にとってはは、蛤御門の変で朝廷に与えた背信は払拭されたとはいえず、再び藩論の不統一を疑われるような行動は厳に謹まなければならない立場にあった。花山院隊の行動は以ての外の暴挙であった。藩庁は花山院宮をおさえて京都に送り帰り、暴発をつよく押さえていた。

御許山騒動は、長州藩にとっては明らかに別派的暴発行為であった。

『十六日、小坂壽吉、仲作聞き合いとして差し出し候えどもくわしく相分かり申さず夜帰村。

日出家中若林殿帰藩に相なり候由。宇佐辺の風説、四日市放火はこの辺風聞の通りの事。

一、御許山へ相籠もり候軍勢は差し加え候ておよそ百

二三十人 白旗・紫旗二本 紋は丸に二ツ引月日

の旗の事

一、長須辺より武器など御許山へ運送いたし候事

一、御許山ふもとへ昨夜酒宴に下山の由 今朝登山い

たし候由の事

右あらまし相記し候。くわしき儀も宇都宮帰藩に相なり候えば相わかり申すべき由の事。』

この行動は義挙であり、あくまで正義に基づくかねばならなかった佐田らは、類焼した四日市の民家や負傷者に見舞い金を、徴発した人馬には駄賃を支払った。

『十七日、龍王妙庵寺より別府御警衛所へ右一件注進の由承り候ところ、龍王庄屋もとにキノミ萬来屋へ兵糧

米、米など無心に両三人折り々罷り越し候由。

御許山より合図いたし候えば、長州沖辺より大砲いたし双方より合図の事。

旗紋は風聞の通りの事。

右妙庵寺使いより承り候。別府行き封箱は、早打ち人足を以て古市へ継ぎ立て候事。

小浦村は小坂村と同じく、宇佐に通じる佐田街道と小倉街道に面した交通の要衝であつたので、小浦村の庄屋脇谷時三郎は行き交う情報にたえず耳をそばだて、情報は洩らさず克明に記録し、また分析していた。

『十七日夜、御米積み立てのため南石垣欣之進来る。今晩、北組御米積み込み鶴崎表へ運送いたし 十八日昼まで八百俵あまり五船(艘力)を以て：』

暴徒が中須賀(四日市)の御蔵所の蔵米を掠奪する恐れがあるとの報が入ると、横灘(別府)北組の村々は、御許山と佐田街道で結ばれた小坂蔵所の襲撃を恐れて、

十七日一晩で八百俵の蔵米を急遽鶴崎へ移動させた。

蔵米積出で大騒動の有様は、南鉄輪村の庄屋日記にも見られる。

「十六日 晴 曇

一、右大変に付き小坂御蔵所番人村々より差し出すむね廻状これあり候に付き、南鉄輪村より四人、北鉄輪より四人つかわすなり。

十七日 晴 曇

一、南三ヶ村(浜脇・田野口・別府)ありあわせの船差し遣わし申すべく候あいだ、小浦、古市、亀川など居りあいの船を以て、今晚中に小坂御蔵お米早急鶴崎表へ運送いたすべきむね通達にてこれあり候あいだ、北石垣へ彦通、野田へ彦通急廻状差し出し精夫兩三人ならびに上乘にもいたすべき人召し連れ、この状着き次第御蔵所へ罷り越されるよう申し遣わし候。某夜半頃より御蔵所へ罷り越し候 既に南石垣氏同所に着相なり、追いつ古市氏も高松より帰村に付き出張。古市・亀川の船手当っていたし、田野口・濱脇船一同御米運送いたす

也。別府船は遅れ着に付き直に返す。

御許山に立て籠もった花山院隊の総裁は、攻防戦で戦死を遂げた福岡藩脱藩浪人の桑原範蔵であった。年令は不祥であるが、頭領については次の文章がある。

『大將分は建烏帽子・白鉢巻・陣羽織、歳八十七八才より五十才くらい由、美々しき出で立ちの事 種々風説これあり候えとも相記しかね候』

また、六十余人の隊員のうち、豊後の出身者は日田の咸宜園で儒学を学んだ者、豊前の出身者は神官や国学を学んだ者の影響を受けた農民や町人出身のいわゆる草莽の士達であった。

十八日、横灘北組の危惧が的中して、駅館川べりにあった四日市御蔵所が襲われ、蔵米が奪われたこと、御許山の陣中の模様などの情報を、日出藩から入手した。

『十八日写し、日出表より出候由古市氏より借受』

一、日足より浪人のうち、高田大庄屋に杵築辺通行も

いたすべき候由人夫用意頼み候由

一、高家沖に大船三艘相見え候由

一、ヤクわん川（驛館川）辺に御料御蔵これあり、それより今日米運び申し付け候由

一、御許山には錦の旗相見え候よし。今日は二本に候由

但 花山院の宮様御印のよし御座候。もともと紫幕張り回しこれあり候ところ、紋は丸に三ツ

柏に御座候

一、今日四ツ時分白幕取り払い申し候

右振り合いに御座候。

正月十六日

御許山の錦旗は、三条実美の令書により授かったものであるが、長州藩はこれを、三条実美の名を騙ったとしてのちに厳しく非難している。

花山院隊は、嶋原藩高田役所・日出藩・杵築藩・中津藩など近隣の諸藩や有志につきぎのような檄文を送って、義挙に参加するよう呼び掛けた。高田大庄屋から狩り出

された人夫はこの使者になったのであろう。

檄文は、「御許山義挙録」によれば次のように書かれていた。

「徳川内府は一たん大政を奉還したが、なおお慮にもとる。去る三日、鳥羽・伏見において官賊が鋒を交え、官軍が勝利を収めたが、今や朝廷の危急存亡の秋である。よって花山院の三位前中将殿、西州の官軍を募集され、本宮を馬城峰（御許山）に置かれたので、有志の輩は速かに馳せ参ぜよ。

馬城峰

会議所

諸有志衆中

義挙の呼び掛けに緊張した諸藩は、軽々しく呼応せず、国境に藩兵を繰り出して警戒体勢をとった。しかし、これに応じてし、佐田村から佐田秀の門下生や一族の者など十六人ばかり馳せ参じたという。

次の、房ヶ畑より古市への書状写真は、当時の民間情報

で、かなり流言蜚語が交じっているが、「この末いかに押し移り申すや」不安の思いがつのつていた。

『房ヶ畑より古市への書状写

しからば右大変の次第とりどりの評判にて、たしかなるぎトント相わかり申さず。しかし、四日市御陣屋

第一番東御坊の市郎右衛門宅焼き打ちにいたし候儀は相違これなく お村かたの者見聞の通りに御座候

一、一昨十四日夜半、高家村へ長州勢着船 直ちに四

日市へ打ちより右の次第

一、只今のところ、百六十人程御許山へ相籠もりおり

候

一、昨日正覚寺村へ六人参り、酒食いたし飯米無心な

ど申し出候事

一、軍用道具船、昨日七ツ時頃着船、今日御許山へ持

ち寄り手配いたし候事

一、右人数の内、当方近辺の者両三人相加わり居り申

し候事

一、四日市へも昨朝老人差し出し置き候えども 未だ

歸村これなき事

一、久留米役人行方相知れ申さず風聞の事

一、この上相わかり候えば追って申すべく候はば、只ただ一同心配いたしおり候ばかりに御座候。この末いかに押し移り申すや、深くお推察下さるべく候

右取り込みお答えまで 草々以上

正月十六日

到着があとさきして、少し古い情報であるが、やはり民間では御許山を占拠した一団は長州勢であると誤解していたようである。

久留米藩四日市陣屋の惣奉行榊次太夫と農兵は衆寡敵せず、一時退去して藩の援軍を待ったが、藩は政局を慮って出兵を躊躇ちゅうちゆしたために、御許山の討伐戦に間に合わず後に奉行は責任をとって割腹した。

房ヶ畑の知らせについて、次の御許山により近い西屋敷村治左衛門からの情報は一段と詳しく、暴徒が抜刀して物資を強要するなど、御許山は占拠したものの思うよ

うに事が運ばぬ花山院隊の苛いらだ立ちがうかがえる。

『十八日昼頃西屋敷より到来

前略、去る十四日夜四ツ頃、四日市御役所へ諸浪人の由、つごう百人何処となく押し寄せ大砲を打掛け焼失、その上東御坊所庄屋もと共右同断。一同焼き払い金子二千両程と大砲三挺奪い取り、そのまま御許山へ竈城いたし、右大砲は百姓月番呼び出し、御許山へ持ち登らせ申し候。御公料近村より兵糧・野菜など取り寄せ申し候。人夫共島原領より多人数呼び出され大いに迷惑つかまつり候。昨今にては中須賀御蔵所へ押し寄せ御米を奪い、ならびに農兵を打ち取り候由にて、同日二・三十人程下山、実は大混雑つかまつり候。しかれども、当御領分（西屋敷）のところ未だ何たる儀も御座なく候。御安意下さるべく候。追い々はあと手勢七八百も御許山へ馳せ来候由、さ候えば大麥押し移り申すべく愚案仕り候。一昨日より御許山へ陣所として大造の小屋掛けいたし、右人夫藁・縄・竹など近村へ申し参り、差し出さず段申し候えば直ちに刀を抜き

言語道断乱暴つかまつり候由に付き、やむをえずこと
その意にまかせまかりあり候。追い々は久留米様始め
その外御大名御固めにも相なるべく深察奉り候。右御
知らせとして申し上げたく、筆紙に申し上げ難く候。

草々以上

正月十八日

治左衛門

時三郎様

二白 風聞承り申し候えば高松表も騒がしき趣き承り
申し候。この節御許山籠城の大將分、八十七八才くら
いと五十才くらい両人の由、絹布に建烏帽子、白鉢巻
その頂は絹布ならびに紺の唐人袖、ぼたん付きを着服
つかまつり候。その外は股引、割羽織の由承り候に付
き思い出しまかせ申し候。

周辺の住民は、やがて花山院隊の有志が七八百人も大
量に参加して、騒ぎが拡大するかも知れぬという恐れが
あった。唯一の頼みは久留米藩の巻返しのみであった。

近辺の諸藩に勤王の義挙を促す花山院隊の不気味な動
きは、やがて大挙して日田へ攻め込んでくるとの風聞を

流した。

戊辰戦争でも旗色の悪い旧幕勢力に不安を抱いた西国
郡代窪田治部右衛門は、正月十七日の夕方、ひそかに日
田を捨てて肥後に逃亡した。空き家になった日田には、
すかさず森藩兵（久留米）が進駐して警衛にあたった。

九州の時局が大きく動いた。

『十九日承り候ところ、日田御支配村々久留米様へ御預
けにあいなり候段、取々風説これあり候あいだ、頭成
へ聞き合せ差しつかわし候ところ、右儀は頭成御役所
より御口達写し左の通。

口達

今晩有田より飛脚到来のところ、当節の時勢に付き永
山御陣家御郡代始め残らず昨夜退去相なり候あいだ、
当方より御差し出しの御同勢、朝廷のため御陣屋始め
これまで永山にて支配の郷村御守衛なられ候。この段
相心得申すべく候。

辰正月十八日

時三郎が頭成役所に問い合わせしたのは、隣接する頭成町（豊岡）が森藩久留島領であつたからである。「口達」の「朝廷のため云々」は、九州では薩摩藩についていち早く朝廷に恭順の意を表し、京都に藩兵を送つた森藩の面目躍如たるものが窺^{うかが}える。

決起を促す檄文を携えた花山院隊の使者は、十九日も日出城下に現われた。日出城下で使者に遭遇した小坂村の組頭林^{りん}太は、さっそく別府警衛所に次のように報告している。

『十九日、小坂林太殿日出へ要用の由罷り越し参り合わせ候ところ、今巳の下刻御許山へ相籠もり候浪人の内兩人、使者として日出表へ罷り越し候えとも、何用共相わかり申さず帰村。もつとも南国屋へ着の由、右の段別府御警衛所へ注進申し上げ候』

『廿日、濱脇浦へ薩州蒸気船追いつき乗り込み候次第に御座候段、同所本陣より南鉄輪へ申し参る。同氏より廻状これあり。決して小前（百姓）共騒がぬよ様の事』

濱脇浦に薩摩の蒸気船が入港するとの情報が入つた。

肥後藩が警衛する幕府領の濱脇浦にである。そこに薩摩の艦船が乗り込むことは、日田の西国郡代をめぐる九州の政局に微妙な空気を醸^かす事になる。小前が騒ぐのは当然である。結局、濱脇浦に薩摩の軍艦が入つたという記録はない。緊張が生み出した流言蜚語である。

二十日になって騒動は急激な展開を見せた。

花山院隊討伐のために、長州藩報国隊の山口格之助と福原幾^{いく}弥^やらが藩兵百二十人を率いて豊前宇島港に上陸した。翌二十一日、中津藩に大砲の借用を申し入れ、直ちに四日市の西本願寺別院正明寺に陣をしいた。

宇佐地方の警衛を任されていた久留米藩は、長州藩に先を越されておおいに面目を失つた。

廿三日、宇佐神宮会所で首謀者と会見した長州隊の代表は、拳兵が藩の名を騙^{かた}つた、勅許を得ない暴挙である事を強く非難して、脱隊違反者の引き渡しを強く要求した。脱隊者の代表若月隼人は、「脱兵というが、我々は天下の志士である。報国隊に身を投じたのは国事に尽くすための方便であり、長州藩に身命をいたす為ではない」

と抗弁して、隊士の助命を願って自刃した。また、佐田は、挙兵が「暴挙でなく義挙である」と決起の大義名分を説いたが、その場で斬殺された。

『廿三日、濱脇御出張毛利莫殿・村田学太殿探索方にて四日市辺まで罷り越し候』

一方、長州隊が暴徒鎮圧のために四日市に進出したとの情報を受けて、肥後藩の濱脇本陣から毛利・村田の二騎が四日市の探索に出立した。

濱脇本陣では、正規の長州隊が乗り込んだ上は、討伐の結果は最初から見えているので、二騎の派遣はおそらく、花山院隊に対する長州隊の始末を見届けるためのものであろう。それは、毛利莫が後にもたらした報告の中の「長州勢の致し方誠に名士の由」にうかがわれる。

二十三日、長州隊は下山した佐田らを処分すると、一斉に御許山の攻撃を開始した。無勢の花山院隊は総裁桑原範蔵が討死して、ついに山上の僧坊も焼け落ちた。隊士は戦死、ある者は逮捕され、東九州勤王党の夢は潰え

てしまった。

毛利、村田からの第一方が届いた。

『廿四日、探索方送夫罷り帰り候ところ、昨夜半の頃、御許山え火の手上がり、人家にいたし候えばおよそ七八軒も焼失のよう見受け候段承り候』

僧坊の炎上は遠目に大きく見えたであろう。

重傷を負った肥前松浦出身の柴田直次郎、首謀者と目された佐田秀と脱隊者代表平野四郎は斬首され、「口に正義を唱え盜賊の所業せし者」と捨札のもとに晒さらされた。敗残隊士の中には夜陰に紛れて密かに脱出するものもあった。

『昨夜半頃、頭成富屋佐助方へ浪士と見受け候七人止宿いたし候由。今朝上の道を通行に付き、段々問い合わせ承り候ところ左に』

昨夜九ツ時分、魚漁より罷り帰り居り候ところ、壮士七人参り宿を相尋ね候うち、直に座に上がり、今晚

一夜明させ呉れ候よう申され候に付き(いたし方これなくその俣にいたし)食事は如何と相答え候ところ、先刻いたし候由、皆々申され候は、我共この方に参り候儀は決してわき方へは勿論、隣えも決して相知らせ申さぬよういたし呉れたき段精々申し、止宿に相なり候。

廿四日朝、何方の御人に御座候やと、相尋ね候えども、何国へ御通行に相なり候や相尋ね候えども、何も返答これなく、唯々草臥れ難渋の由、もつとも、衣服などいづれも美々しく見え、突袖に割羽織・袴、その内三十四・五歳ぐらいの人大将分のように見受け、この人別て足痛み難渋の由、この段隣家より割当衆へ申し出てその御役所へ申し上げ候ところ、早々追い立て候よう仰せだされ候に付き、旅人など宿つかまつり候ては御調べにも相なり候あいだ、早々御出立ちください候よう申しむき候ところ、三十四五歳の人四五日かくまい呉れ候(金子は多分に遣わすべし)足痛に付き旅行できがたく申され候えども、道を申し問い出立に相なり、左助案内いたし当村より登り、頭成境目塚原

道を行き候由に御座候。

承り候は、馬城山へ立て籠もり候浪士、長州の名をかたり候に付き、討ち取り方として長州より御人数差し向けに相なり、則昨晚焼失落城に相なり候由、右に付き日出表より三十人余御探しに相なり候段も承り申し候。

右承り候風聞、当村通行に相なり候旁に付き、濱脇陣中庄屋御注進に罷り出候こと。

また、隊士の徘徊や逮捕の状況の報告がつづく、

『廿四日 濱脇陣中、御本陣崇福寺右一ヶ条申し上げる。長寛寺御本陣中へ止宿いたし申し候。夜九ツ時頃油布院より注進候は、怪敷浪士十九人当邊に止宿の段申し来たり候に付、御本陣崇福寺より六十人あまり召し捕方出張。』

廿五日 早朝帰村、

真玉野村氏より御許山一条の書状昨夕到来。くわしく

申し来たり候。

濱脇御陣屋へも朝見駒之助持ち帰り、御許山賊士油布院辺において濱脇御出張衆え召し捕られ候由。

村田林太殿御帰陣に候えども、留主中に付き承り申さず。種々風評これあり候えども取々の噂に付き取留め候儀はこれなく候。

脱走隊士は、案の定佐田街道を東へ走り、頭成へ出て十文字を抜けて塚原へ、また、石垣・鶴見村を経て花棚道を越えて由布院へと逃亡の道をたどったようである。各村々ともかなり緊張して警戒したようである。隊士の詮索については、南鉄輪村庄屋佐藤邨彦の日記にも詳しく書かれている。

廿四日 晴 寒

『明治維新史料』

一、豊前御許山へ籠り居り候浮浪の徒、長兵の爲に攻め落とされ候旨濱脇御本陣詰め与頭新平より今夜中早速申し来る。

廿五日 晴 寒

一、源兵衛火急に亀川より走り参り、只今野田村左藏遠見走り参り申し出候は、花棚越に御許山の敗兵と見え二十人ばかり相見え段、申し参り候との事にて即刻直ちに亀川より濱脇御本陣へ注進候。某帰村いたし直ちに濱脇御本陣へ罷り越し候。吉弘墓南にて敗卒兩人見受け候に付き追いかかけ候えども見失い申し候。

一、この夜塚原温泉場所にて敗卒十一人御本陣御手にて召捕らえ候おもむきにて濱脇御本陣へ御召連れにて御口開きこれあり。右の者大抵町人百姓共の寄集りに候事。

一、濱脇より御人数御繰り出しにて実相寺山など穿鑿にて、右人数罷り越し当家において夕食也。

『毛利莫殿御帰陣 詳しく承り得申さず。長州勢のいたし方誠に名士の由、未だ百人余四日市え滞陣の由、野村氏よりの書状と釣り合い候に付き是れを以て実正と

いたすべき事。

西国郡代が逃亡した日田には、十七日に森藩が、十八日には肥後藩、二十一日に筑前藩が、つづいて久留米藩が進駐し、四藩の藩兵であふれた。遅れて薩摩藩もこれに加わった。政府はこの五藩の進駐を黙認していたが、二月二十一日に岡・森の二藩に豊後の朝廷領の管理を委任して、曲がりなりにも「御一新」の世となった。

「馬城峰（御許山）で挙兵して、日田を陥れ九州で尊皇攘夷を実現する。」との東九州勤王党の目論みは、慶応二年、長三州（光太郎）により練られ、草莽の志士を糾合して進められた計画であった。大政奉還・王政復古という目まぐるしく動く時局の大きなうねりのなかで、その意義は霞んでしまった。首謀者の長三州は、計画の失効と無謀さを説くようになり、自から離脱してしまつた。

佐田秀（内記兵衛）らは、僅か六十余名でついに断行した。朝廷に恭順を勧める勅命にすら躊躇して応じ兼ね

ている近隣諸藩が、無名の土の決起に呼応することは先ずあり得ない。しかも、長州藩の反撃は十二分に予想される。御許山騒動は、このような孤立無援の状況のもとでしやにむに断行された挙兵であった。

しかし、無謀な行動であったが、日田を混乱におとし、いれて、「九州御一新」のインパクトとなった事は否むことはできないであろう。

最後に、わが郷土の志士矢田宏の事にふれたい。彼は石垣の名医矢田淳の長男である。

宏は、若くして成宜園で学び、先輩の長三州に心酔してその後も、彼を慕って尊皇攘夷の運動に身を投じた。御許山騒動では、宏は別働隊として慶応三年十二月、郡代の管理下にある天草の富岡陣屋を襲って、八千両余の金を奪い取った。このうち四千両を武器購入資金とし、残りは同志の軍資金にされた。しかし、時局が変わり、無謀と無意味さを説く長三州に同調して、御許山騒動には参加しなかった。